

れきし散歩

—世界に冠たる明治生まれの亀山人—
映画監督衣笠貞之助と言語学者服部四郎
衣笠貞之助、いつも見ていた故郷

はじめに

1月4日から始まる歴史博物館の企画展第2部「衣笠貞之助、いつも見ていた故郷」は、映画監督としての業績や故郷への思いを、彼の遺品を中心に紹介する展示です。そこで、今回のれきし散歩では、出品資料から、彼と故郷について窺います。



衣笠貞之助の名乗り

衣笠貞之助の本名は、小亀貞之助です。明治43(1910)年に亀山男子尋常高等小学校の高等科を卒業した貞之助は、私塾笹山塾に通いながら、芝居に強い興味を抱いていました。

大正3(1914)年からは、実際に女形の俳優として活躍し、いくつかの芸名を経て、大正6(1917)年、21歳のときに衣笠貞之助を名乗りました。

「衣笠」の由来は、京都の衣笠山が見える下宿にいたから思いついたと、自伝で語っています。

衣笠貞之助は、女形のときに生まれた名前ですが、大正11(1922)年に映画監督になってからも、引き続き用いていました。

小亀貞之助と衣笠貞之助



京都市左京区浄土寺自宅の表札

明治29(1896)年1月1日に生まれた小亀貞之助は、昭和57(1982)年2月26日に86歳で死去するまで、65年間を衣笠貞之助として歩みましたが、そのほとんどが映画監督としての衣笠貞之助でした。

彼にとって小亀貞之助と衣笠貞之助にどのような区別をしていたのかは定かではありませんが、家の表札に小亀貞之助を用いていることは、自身の心の内に公私の区別があったのかも知れません。しかし、遺された品々には、やはり自他共に「衣笠」の表記が多く遺されています。

小亀貞之助の徴兵検査



小亀貞之助の補充兵証書

衣笠貞之助の遺品には、大正5(1916)年に津聯隊区司令官が発行した「補充兵証書」があります。

それには、「第二乙種輜重輸卒第貳拾貳番小亀貞之助」とあり、陸軍補充兵に編入することが書かれています。これは数少ない本名による遺品です。

貞之助が徴兵検査を受けたのは、役者になるため家族の反対を押し切って家出同然に家を出ていていたときでした。自伝によれば、実家へは寄らずに検査場へ行ったとき、次兄の取りなしで母と対面した折、「風の吹く日、裏口で物音がすると、もしや帰って来たのではないかと、そっと戸をあけてのぞいたことが、幾度あったと思う」と言われ、「全く返すことばはなかった」と語っています。

おわりに～故郷への思い～

貞之助は、数多くの原稿を遺していますが、故郷亀山を語ったものに、母から聞いた話として母の実家である原尾村で伊勢暴動を体験した「禁じられた刀剣」や書きかけ原稿の「かわらない古里」、「母は偉大」、「故山遠慕」があります。



母かめの伊勢暴動体験談を貞之助が回想した「禁じられた刀剣」

これらの原稿の中には、そのまま活字になっているものがあり、それだからこそ衣笠貞之助名で書いているものもあります。したがって、彼にとっての故郷は、小亀貞之助の故郷であると同時に、その表現は、映画監督衣笠貞之助の故郷として心の中で映像化されていたのかもしれない。